

第6回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

平成30年1月26日(金)14:30～16:15

2 開催場所

広島市役所本庁舎14階 第7会議室（広島市中区国泰寺町一丁目6番34号）

3 出席者

懇談会構成員

団 体 名 ・ 役 職	氏 名
広島県原爆被害者団体協議会 事務局長	前田 耕一郎
広島市立大学広島平和研究所 副所長	水本 和実
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
特定非営利活動法人ひろしまジン大学 代表理事	平尾 順平
被爆体験証言者（平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事）	原田 浩
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長	辻 孝和
広島市市民局国際平和推進部 部長	津村 浩

（計7名、欠席2名）

事務局

観光プロモーション担当課長、課長補佐

株式会社 J T B 中国四国地域交流推進課ディレクター（計3名）

4 議題

(1) 懇談会のとりまとめ案（ピースツーリズムの円滑な推進に向けて）について

(2) ピースツーリズムを進化させていくための取組について

① アンケート調査

② ルート周遊体験調査

(3) その他意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

2名

7 会議資料名

資料1 ピースツーリズムの円滑な推進に向けて～ピースツーリズム推進懇談会とりまとめ(案)～

資料2 ピースツーリズムの円滑な推進に向けて【資料編】～ピースツーリズム推進懇談会とりまとめ(案)～

資料3 ピースツーリズムの円滑な推進に向けて【とりまとめ概要（案）】

8 発言の要旨

（原田座長）議論を進化させていきたいと思うので、忌憚のないご意見をいただきたい。前回の懇談会の後にも色々ご意見をいただいたので、それも踏まえて議事を進めていきたい。

《事務局から資料に基づき説明》

◆懇談会のとりまとめ案（ピースツーリズムの円滑な推進に向けて）について

（前田委員）前回までにほぼ形作られているが、読み返してみると、何となくしっくり来ないところがある。特に3ページと4ページはピースツーリズムの理念の部分だと受け止めている。目指す姿が目的であり、取組方針・取組概要がその手段であり、それに見合ったような分け方をしているほうがよいのではないかと。目指す姿では、“～提供していく”といった書き方をしているが、目的であれば違った書き方があるのではないかと。具体的な書きぶりについては、また事務局に案として示したいと思う。発信方法について、議論の中では、広島から発信するだけでなく、広島を訪れた人がさらに発信していくということがあったが、その点がどこかに書き込まれるとよいのではないかと。8ページについて、環境づくりについてというタイトルであるが、中身は全てルートのことなので、ルートに絞るのであれば“ルートについて”とすればよいし、大きく環境についても触れたいのであれば、環境づくりのことを委員の意見を取り入れて書いたらどうか。具体的には、環境について、市民と一緒にやっていくという意見が私には新鮮だった。市民の積極的な関与ということがしっかりと項目立てされているので、それを含めたような表現にし、市民が関わる環境づくりといった内容でうまくまとめられないか。考え方のレベルを整理して、再構成した方がよいのではないかと。懇談会での意見で、「市民と共に」ということがキーワードになると思うので、打ち出したらどうか。

（渡部委員）懇談会の議論に参加していない人が読んだ時、ピースツーリズムの目的はルート設定だったのかと感じられるのではないかと懸念がある。今までの議論を丁寧にまとめられているが、初めて読むと、具体的なルート図まで付いているので、ゴールはルート設定だと誤解されかねない。ピースツーリズム推進懇談会は、単なるルートの設定ではなく、もっと大きなものを目指していたのではないかと感じているので、それを最初に打ち出したほうがよいのではないかと。現実の被爆の痕跡や人を通して被爆の実相を伝えるということ、それを行政だけがするのではなく市民と共にすること、そして行政組織でいえば広島市とその外郭団体全てがそれを感じていただけるよう一つになって努力していくということ、きちんと書くことが大事ではないか。そのうえで、試行錯誤を重ね、市民の皆さんの意見を聞きながら、常によりよいものにしていくための努力を続ける。ルートは、仮ルート提案なのではないか。これをたたき台としてこれから皆さんと考えていきますという姿勢で書いてはどうか。

スマートフォンを活用した方法について、誰を対象したものになるのか。日本語だけに限定した発想では残念過ぎる。

もう一つルートについて気になっているのは、平和記念公園・周辺地区の1-5としておりづるタワーが入っている。民間事業者のものであり、これから話し合いをしていくべきところではないかと思っているが、何を発信する場所として位置づけられているのだろうか。

（平尾委員）次の議題の中のアンケート調査において、ピースツーリズムというタイトルについて聞く項目があるが、何人かネイティブの人達にピースツーリズムという言葉聞いてどうかと聞くと、ピースツーリズムとは一般的な言葉ではなくて、何をするものなのかイメージしにくいとのことだった。このことから考えても「ピースツーリズムとは」という、定義づけが最初にあったらよいのではないかと。私達の考えるピースツーリズムとはこういうことですということを、目指す姿の前に定義の説明としてあってよいのではないかと思う。

また、伝える内容と伝え方について議論があった中で、伝える内容についてはしっかりと議論して固めていかなければならないが、伝え方については、時代や利用者にあわせて柔軟に変わっていかねばならない。スマートフォンを活用した方法については、一回作ってしまっただけで終わりでではなく、すぐに古くなる。伝え方、手段については、常に利用者からフィードバックを受けながら進化し続ける必要がある。そのあたりも書かれているとよいと思う。

(水本委員) 目指す姿において“丁寧な案内を提供していく”と提供者の立場で書かれているが、提供するだけでなく、旅行者と市民が一緒に考えていくという表現の方がいいのではないかと。また、“行動を起こすことの動機付けに繋げる”という部分は、趣旨はよいと思うが、海外から来られる人にはすでに行動を起こしている人もいるので、行動を「とる」ことの動機付けという程度でよいのではないかと。4 ページにおいて、外国人旅行者や修学旅行生を対象と限定しているが、5 ページに“初めての来訪者向けのコンテンツ、若い人に訴求するコンテンツ”という表現を使っているため、「外国人旅行者や修学旅行生など初めての来訪者や若い人を主な対象」とした方がよいのではないかと。5 ページにおいて、アンデルセンなど企業名が記載されているが、挙がっていない企業もたくさんあるので、具体的な企業名ではなく、広島で被爆を乗り越えた企業など表現を変えた方がよいのではないかと。同じく 5 ページの、“夜の過ごし方の提供”は「夕方以降」とした方がよい。7 ページのスマートフォン等を活用した方法については、日本語はたたき台であって、多言語にしていこうと確認しておいた方がよい。9 ページの“音楽という文化的要素を加えたまちづくり”は、音楽も大事だが、芸術と大きくしたほうがよい。16 ページの“飲食店等の民間事業者”は、飲食店に限定するような印象を持たせるので「商業関係者など」と表現を変えた方がよいのではないかと。同様に、18 ページの“飲食業の方々からも来訪者に情報提供してもらおう”という部分も修正した方がよい。資料 3 の“市民等との協調体制の構築”において、市民等は個人だけでなく「民間組織」なども含めた表現の方がよいのではないかと。と思う。

(辻委員) 来訪者を迎えるための環境づくりにおいて、ルートに固執しているきらいがあるように思う。平和に関する場所 53 箇所があり、各施設の説明板の古さなど施設そのものの環境づくり、内容づくりをしないといけないとの意見が前から出ていたが、資料をまとめていく中でルートのことを中心としたまとめ方になっている。ピースツーリズムの推進にあたっては、説明板等により施設の情報を見える化し、市民の参加意識を高揚させるという形になるとよい。来訪者を迎えるための環境づくりは、ルートだけでなく、施設そのものについてや、市民の受け入れについても書いた方がよい。これが太い串になる。

(津村委員) ルート設定について、平和部門を所管する立場から言えば、今まで知られていないところも移動可能な範囲で網羅してあり、それらをテーマに沿って効率的に回っていただくためのルートの提案であり、ありがたいことであり、むしろこれを強調していただきたい。しかし、環境づくりは、それぞれの施設のあり方、発信の仕方、市民との協調のあり方なども含めたものであり、表現や構成に工夫が必要だと思う。企業の固有名詞の記載については、水本委員ご指摘のように、確かに差し障りがあると思う。もう一つ、“佐々木禎子など”との表記があるが、佐々木禎子さんとした方がよいのではないかと。スマートフォンを活用した方法については、多言語化はこれからの課題として考える必要があるが、画面の遷移などについても、日本人と外国の方で感覚が違うところもあるかと思うので、使っていただく頻度を上げるには、

画面展開の傾向などをネイティブの方々のご意見をうかがいながら改善していくという形がよいのではないかと。

(事務局) 本日いただいた意見は、構成、表現を工夫しないと初めてこの資料を見る方には分かりづらいというご指摘だと思うので、この案を最終的な形にするにあたり個別に教えていただきながら修正を加えていきたい。スマートフォンを活用した方法については、資料は日本語の画面を掲載しているが、今年度は日本語と英語を作ることになっている。次年度以降、本日お話をあった多言語化についても考えていきたい。

(原田座長) ルート設定が目立つというご指摘があった。最初はどこまで広がることになるのか、模索の状態からスタートしたが、6回の会合を経て、各委員から数多くのご意見をいただいたのは、大きな成果だと思う。固有名詞の表示、表記方法等についてのご意見があったが、それらを踏まえて、次の懇談会に向けて整理をしていきたい。

(辻委員) 4ページの取組概要に“来訪者を迎えるにあたっての環境づくり（ルート設定等）”とルート設定という表現が入っている。それぞれの施設の再整備をする必要があると思うので、例えば“来訪者を迎えるにあたっての環境づくり（拠点の再整備とその周辺の整備によるルート設定）”とすると、ピースツーリズムが来訪者に平和記念資料館（以下「資料館」という）等以外を見てもらう形で進んでいくということが分かるのではないかと。もう少し言葉を加えた方が誤解されにくい。

(渡部委員) 憲法でいうと、憲法前文にあたる文章が要るのではないかと。先ほど平尾委員が言われた、ピースツーリズムとはという、目指すもの、決意表明が要ると思う。そのうえで、具体的な取組方法などについて、ルート設定のための懇談会だったとは感じられないよう、多くの議論のこともきちんと書くことよいのではないかと。決意表明をするにあたっては、今の広島市の行政のあり方について思うところがあり、広島市には他の地方都市とは違うミッションがあり、そのために広島市も外郭団体も市民も一丸となって、平和都市であるというミッションに向かって進んでいくんだということも、きちんとこの機会に表現してはどうか。高い志に向かって様々な部局が一つになって、横断的に繋がっていくということを書くことができればよいと思う。

(原田座長) 皆さんからのご指摘を踏まえ、もう一度整理をしてお示ししたい。

◆ピースツーリズムを進化させていくための取組について

(前田委員) アンケート設問 12 の、“平和への思いを共有していきたいと願っています”という部分が、少し言葉が繋がりが悪いので、工夫が必要だと思う。

(渡部委員) できるだけ多様な方のご意見をくみとる努力を続けていただきたい。実際に歩いてみて、歩けば歩くほど、見れば見るほど、色々と気付くことがあった。広島に生まれ育っていても、改めて眼差しを持って歩いてみると見えないものが見えてくるということがあったので、継続して丁寧やっていくということに尽きるのではないかと。市民の中にも、意見を言いたいという方はたくさんいると思うので、それを聞く窓口が分かるように設置されるとよいと思う。

(平尾委員) ここで作られるプログラムがこれで完成ではなく、どんどん成長していくもの、皆で育てていくものであるということを踏まえると、アンケートはとても大切で、常に意見を拾いながら、アップデートなものに形を変えていくプログラムであつたらよいと思う。そ

の意味では、各施設の管理者や、一般の市民の方にも、これによってどんな変化があったかとか、どういうことをもってしていけないかといけないうことを定期的にアンケート調査してもよいのではないか。具体的な設問については、まず設問3について、宿泊の観点から大事だとは思いますが、宿泊に限らずどこから来たかという設問が必要なのではないか。ピースツーリズムを広島でしているということを広報するにあたって、広島に来る前にどこにいた人が多いかを踏まえて、ある程度場所を選定して打つことが必要ではないかと思う。設問11のピースツーリズムという言葉についての問いは、広島に来た人に聞くのも大事だが、広島に住んでいるネイティブの人に聞いても分かると思う。ピースツーリズムという言葉は不思議な響きをもっているということはかなり言われたので、もう少し言葉に関する検証をしてもよいと思う。

(水本委員) ピースツーリズムという言葉にどういう思いをこめられているのか、後で聞かせていただきたい。アンケート調査は、対面調査で少数の人にじっくり聞くやり方と、できるだけ大勢の人に聞くやり方がある。今回は50名以上とのことなので前者だが、それ以外にもウェブなどで大勢から聞くものもするとよいと思う。質問項目においては、最初に、なぜ広島に来たのかということを知るとよい。また、設問3で、昨夜にどこにいたかだけでなく、次にどこにいくかも聞くとよいと思う。

(辻委員) アンケートを依頼し説明するときに、ピースツーリズムについて説明しないといけないうと思う。具体的な内容を聞くにあたっては、設問に出てくる場所やルート案についての資料がないといけないう。

(津村委員) ネーミングについて聞くと、どんな選択肢を示すか、国際交流員などの意見を聞いてはどうかと思う。

(事務局) 最初にこの事業を考える際、市議会から、平和をテーマに広島に来る人が多いことから、その人達に関連する場所等巡ってもらうなどの施策を実施してはどうかとの提言があり、その際ダークツーリズムという表現が使用されていた。それを受けて考える際、広島市としてダークツーリズム推進事業とした時、人の死などマイナスなものだけを見てもらうというイメージになるため、そうではなく、きちんと平和に関連すること、原爆に関連することを見てもらいたいという思いでネーミングした。ダークツーリズムが良いのではないかと議論は、市の中ではなかった。

(原田座長) 長年平和行政に関わってきて感じていることは、何をどうすればよいかという指標となるものがない。広島と長崎には被爆体験があり、それをもとに色々な事業展開をしてきたが、長崎は政令指定都市ではなく予算規模も小さいため、広島と同じように進めようとしても難しい部分がある。一般的な都市行政では、どこかの都市でユニークな事例があれば、それをベースとしてよりよいものにしていく考え方が多い。平和行政については、まさに暗中模索の繰り返しであった。今話のあった、ピースツーリズムについては、まずルート設定が目につきやすく訴えやすいという考え方があったのではないか。ところが、議論を進めてみて、この問題に取り組むのは本当に大変なことだと思う。現地調査をしたときにも皆さんからも色々な意見があったが、これは予算の確保や体制づくりについてしっかり取り組まないと、前に進んでいけないと思っている。皆さんの言われたことが理想的な形だと思うが、最初からそれを求めていくのは難しいだろう。まず1歩でも2歩でも近づけるよう、今年度のとりまとめをしていきたい。外郭団体の職員も、関係の職員も、一人一人がこの気持ちになっていかなければ、い

くらががんばってとりまとめても、成果につながっていかない。そういう意味で次年度においてもフォローをできる体制づくりを願っている。

◆とりまとめ概要のうち、ピースツーリズム推進に際して今後留意すべき事項について

(原田座長) 5つの項目を柱として挙げている。平和について狭義な捉え方をせず、文化も含めた幅広い平和行政というものを推進していきたいというのが広島市の思いである。言うまでもなく広島市は国際平和文化都市という都市像を掲げている。その都市像を目標として行政を進めている。国際・平和・文化が広島 of 最も基本的なキーワードであり、整理するうえでは被爆体験を原点とし、広島 of 発信力を強化する。それを踏まえたうえで、国際平和文化都市というものを総括していきたい。文化振興の関係、国際平和関係の事業については、いずれも市民局が所管しており、市民局の中で調整機能がうまく働けば、整理していただけると期待している。このうち、文化事業については、東京オリンピックまでは、国の助成もしっかりとしたものがあると思うが、2020を過ぎた段階で国がどこまで助成を続けてくれるのか。つまり、来年度、再来年度が文化行政の正念場になるのではないかと。やはり、中核施設として位置づけていくためには、資料館と現代美術館を中心とした平和と文化の発信機能をより強化していく必要がある。そのためには、市民の皆さんとの協調体制をいかに構築していくかということに繋がってくるのではないかと。平和文化センターはもともと広島市の組織であったが、市民の皆さんと一緒に事業展開しようという考え方のもと、財団に作り変えた。その後、昭和56年に文化財団が設立されたとき、平和文化センターの持っていた文化事業を文化財団に移管した。そのため、平和文化センターという名称でありながら、中身は国際平和センターである。文化関係の事業は、文化財団が所管して進めている。ぜひ、協調的な体制を組み立てていけばよいと期待している。今後のピースツーリズム推進事業の展開に際しての調整・チェック機能の構築については、この懇談会を次にどのようにしていくのか、もう少し模索をする時間が要るのではないかと。皆さんのご意見をいただきながら、方向付けしていきたい。市民の皆さんの協力を得るという前提で考えるならば、まず行政が自ら行動を起こしていかなければならないと思う。自分達でできないことを市民にお願いするというのは難しい話であり、平和や文化に関心の高い職員はたくさんいるので、そういう職員達の力を結集してサポート体制をつくっていききたい。職員もこのようにがんばっているのだから、市民の皆さんにもご協力をお願いできないかということに繋がると思う。被爆建造物についても、広島旧理学部 of 件はなかなか前に進んでいないようである。自ら所管する建物を、きちんと方向付けするというのがあるが、民間 of 施設をどう残してもらうかということに繋がっていかないといけない。県においては、被服支廠 of 件は少し動きはじめたようである。県と市 of それぞれ大きな被爆建造物を動かすということになれば、このピースツーリズム推進には大きな力になるのではないかと。

(前田委員) ルート設定がメインになっていることについて、せっかくこれまで議論し、実際に体験してきたので、項目を起こして主なパートとして出すのはよいことだと思う。まとめ方の問題だと思う。

(渡部委員) 市民との協調体制について、“協調”という言葉でよいだろうか。一緒にやっていくということであれば“協働”と言う言葉にするか、それとも、市民が行う様々な活動をバックアップするという市民主体の書きぶりをする方がよいのではないかと。本来、広島市平和文化セ

ンターというのは、市民の平和活動をバックアップする団体ではないかとも思う。広島市や平和文化センターが行うことを市民も応援するけれども、市民が自主的に行う平和活動をバックアップしていったら、ツーリズムの中でも、若い方々が様々な活動をしているのでそれをサポートしていくという書きぶりであるとよいと思う。平和と文化の一体的な推進というのはそのとおりだと思っており、非常に重要だと思う。資料館や関連する被爆の痕跡等の発信力の強化も非常に重要であり、昨日もニュースで本館の展示のことが出ていたが、一つ一つ情報を外に出していただいて、私達が一緒に議論できる機会を作っていただきたい。具体的な一つの例が、本川小学校の平和資料館だ。すばらしい資料館なのにもったいない。あれが活かされればすごく情報発信の源になるというものが、実はたくさんあって、手付かずに残っているのではないかな。拠点施設の確保については、常々お願いしている。暑い中に広島に来た人が、休んで市民と触れ合えるところがない。球場跡地など場所はある。テントでもよいので、来られた人のための施設を設置する必要があるのではないか。今後のピースツーリズム推進事業の展開については、手弁当でもよいので続けていきたい。

(平尾委員) 6月から話してきたことは、ピースツーリズムとは何なのかという概念を皆で作る作業でもあったと感じている。そのうえで、ピースツーリズムにおいて何をしていくかということに関しては、ここまで議論として作ったものはβ版であり、まだまだ進化させ育てていくべきもの、皆で関わっていく余白はまだあるということをきちんと冒頭で言えるとよい。皆でよいものにしていきましょう、皆で広島のピースツーリズムを育てていきましょうということをしつかりと残すことで、一度できたら終わりではなく、市民の皆さんと一緒に常に作っていくものだという概念をちゃんと発信できるものになるのではないかなと思う。β版と冒頭にうたうことは難しいかもしれないが、今回のものは例えばバージョン1.0として、今後も皆で一緒になってバージョンを上げていくものだという事業だということができればよいと思う。今後に関しても、ピースツーリズムの検証・改善懇談会のようなものとして引き続き定期的に繋がっていくと具現化できるのではないかなと思う。

(水本委員) 事務局からピースツーリズムという名称について説明があったが、ダークツーリズムに対するカウンタープロポーザルとしてアピールしてよいと思う。広島は被爆の歴史を単なるダークツーリズムとして終わらせるのではなく、「ピースツーリズムとして提案する」とポジティブに捉えてよいのではないかな。そのうえで、発信力の強化について。発信には、受け入れる側からの発信に加え、ピースツーリストとして旅人として回る側の視点からの発信もあると思う。市民と一緒に回って開拓するような行動もあると思う。市民一人一人がピースツーリストになって、自分のピースツーリズムを提案しようということを市民に呼びかけるということもあってよいと思う。受け入れる場所からの発信だけでなく、市民が旅人と一緒になって回るという視点もよいのではないかな。この視点で整理してみればよいものができるのではないかな。

(辻委員) とりまとめ概要案の1/3をルート設定が占めている。意向は分かるが、その前に、施設の充実、施設の再整備なども書いた上で、ルートについて書いた方が受け入れられやすい。もう少し工夫した方がよい。

(津村委員) 行政や外郭団体、特に平和文化センターが機能を担うべきとのご意見は、エールをいただいたと受け止めている。平和文化センターというのは、市民と近いところで、市民と一緒に平和の発信、平和推進に取り組むというのが基本だと思う。ただ、どちらが主となるべき

かということについては、行政主体で市民の皆さんに事業に参画していただくというものもあるし、市民の皆さんや団体が自主的にされることを行政が支援しましょうというやり方もあり、両方あってよいと思う。色々な主体が主体性を発揮し、色々な連携をしながら、多重的に色々な人が色々な関わり方をしていく、その拠点が平和文化センターだという捉え方をしている。どちらも大事にしていくという気持ちで、職員も取り組んでいると思う。本川小学校の話が出たが、前回の懇談会において資料館本館の補完的な機能を有する施設が近くにあるので活用・連携してはどうかとのご意見をいただき、まずできる所からやっていきたいと思い、平和公園を中心として本川小学校と袋町小学校、旧日本銀行広島支店の3つを掲載し、資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見た後は、周辺にこういうところもあるので見てくださいという内容のチラシを平和推進課で作って、資料館等の目に付く所で配布し、少しでもそれらの施設の来館者を増やしていきたい。そうする中で、それぞれの施設、特に本川小学校、袋町小学校と、例えば展示についてこうしたらよいのではとの助言やその他の連携などがニーズとして出てくれば、それらも精一杯対応しながら、お互いに発信する取組ができればと思う。まずはこれらに行ってもらうための紹介、PRから始めていくよう準備しようと思う。

(事務局) 渡部委員の言われた、今後に留意する事項での市民との協調という表現は、確かに目線が我々目線となっていると感じたので、市民主体ということを入れる形で修正したいと思う。この5項目は今までの懇談会の中の主なご意見がこの5項目に集中していたかと思い記載している。来月の次回の懇談会までに、他にも柱があるといったご意見があれば、事務局に教えていただきたい。先ほどからご指摘いただいている、とりまとめにおいて目指す姿の前に概念を記載することについて、まずピースツーリズムとはどういうことを考えているのかということに触れたうえで、そのピースツーリズムが何を目指していくのかという構成に変えたいと思う。そこに、市民と共にということや、市や外郭団体など皆が一枚岩になって動いていくといった主旨を、考えて整理していきたい。あわせて、その他の項目の中身の言い回しについても、事務局で案を考えてみたいと思うが、委員の皆様からのご意見をいただきながら作りこんでいきたい。また個別にご相談させていただきながら、次回に皆様の総意として整理できればと思う。

(原田座長) 委員の皆様のご意見を取り入れられればよいのだが、それぞれの思いがあるため、最大公約数的なとりまとめになるかもしれない。

12月の市議会の中で、安佐動物公園において平和事業への取組をしてはどうかという質問があった。先の大戦の中で動物が殺処分されたという歴史を考えると、動物園は平和な世の中の象徴ではないか、広島市の使命として安佐動物公園でも平和をキーワードとした取組を行う必要があるのではないかとことだ。こういう視点で取り上げられた例はあまりないのではないか。それぞれのセクションで平和問題に取り組もうとすれば、いくらでも切り口がある。動物公園でいえば、単なる動物園ではなく、平和を象徴する存在として動物公園の役割という切り口があり、折り鶴再生紙を利用した動物折り紙教室を開催していると答弁している。小さなことかもしれないが、そういう取組を行政の各セクションが行えば、広島市全体としての平和文化行政に繋がっていくということだ。そこで提案したいのは、そのような事業を展開するときに調整役が必要だということだ。動物公園がこのような取組をした、市立高校はそれぞればらばらにやったということではなく、これらをまとめて市の行政として発信していくことになれば、多くの方の関心を惹きつけ、市民の参加を得られるのではないか。最後に掲げてい

る調整・チェック機能の構築というのは、事業の具体化に向けていくために次年度以降つなげることにできればよいと思っている。

◆その他意見交換

(水本委員) とりまとめ案についての意見の追加だが、5 ページの“痛みや苦難を共有し”というところに、“希望”ということを加えてはどうか。今後留意すべき事項についての考え方が、ピースツーリズムは教育の教材でもあるので、教育関係者やメディアの人達に協力してもらうということを認識しておいたほうがよい。

(平尾委員) ピースツーリズムで広島がしていることを、いかに発信、広報していくということについては、独立した項目として議論しないといけないと思う。やっちはいるが、外の人は知らない、中の人も知らないということではいけない。

(水本委員) ダークツーリズムという言葉が一部研究者の間で定着しているが、それに対してピースツーリズムという言葉がどれだけ出てくるか検索してみていただきたい。もしなければ、悲惨な体験を「ダークツーリズム」という概念でアピールするのではなく、広島はより積極的な「ピースツーリズム」という概念で発信するのだ、という重要な問題提起を世界にアピールできる。

(渡部委員) 広島市では、平和のセクションは市民局にあるが、色々な局が平和についての発信や施策の実現に関わることがある。具体的には、資料館の保存には被爆体験継承担当のほか、建築のセクションである営繕課も関わる。被爆体験継承担当と営繕課の間でスムーズに意見交換できる場所がもしあればよいと思う。広島市を横断的に結んで、お互いそれぞれやっていることについて意見交換をするということは、多分、市民局が平和を所管していますという今の形では難しいのではないかなと思うのだが、各局と平和施策についての議論というのはできているのか。

(津村委員) 個別には、資料館の再整備については、所管課は平和推進課、公の施設の工事の発注関係は都市整備局営繕課が担当であり、関係課レベルで常に連絡調整しあって意思疎通しながら進めている。それは、特に場やスペースがあるわけではない。もっと大きな話での部局横断的な様々な取組に関する連絡・調整・協議などを行う常設の組織はない。部局横断的な事柄について課題はあると思っている。明確な組織、仕組はないが、幹部会議において、市としては大きな取組、部局横断的なことは幹部クラスでまず共有し、それぞれ自分の局に関係することは指示を下ろし、それぞれ関係するところで連携するという仕組はある。市長は、セクショナリズムにならずに横串のマインドを持てとよく言っており、そういう意識は職員の中でも広がってきているかと思う。

(原田座長) 私が担当していた時の職名は国際平和担当だったので、私が調整機能を持つことが出来た。また、4 人の課長がおり、そのうちの 1 人がプロジェクトチーム担当だったと記憶している。それから 20 年近く経ち、平和文化センターの業務は平和首長会議のウェイトが大きくなって、渡部委員が言われるようなところまで手が回らなくなったのではないかな。今回このような議論をすることになると、何らかの調整機能がないと、単発的な事業、イベントで終わってしまい、次につなげることができない。私は資料館館長も兼務していたので、資料館長の仕事の他、国際平和関係についても、大邱広域市やモンリオール市との姉妹都市提携なども

関わってきた。つまり、横軸の連携プレイができた。そのような専門セクションがあつてしかるべきかと思う。また、幹部会議の構成員でもあったので、国際平和関係の事業については全て私が調整してきたし、企画関係者会議では関係局長4～5人が集まって意見調整するということもやってきた。そのような調整役がないと、具体的に進みにくいのではないか。現代美術館のヒロシマ賞は今年が10回目だが、現代美術を通して平和を希求する制度でありながら、平和行政の担当者には伝わっていない。市民局文化・スポーツ部で所管するヒロシマ賞の受賞者の情報は、現代美術を通じてヒロシマを発信するので、資料館にその旨の展示も必要だろう。アニメーションフェスティバルのヒロシマ賞も、文化財団の仕事ということではなく、平和と文化が融合できれば、広島市にしかできない事業展開に繋がっていくのではないか。やり方はいくらでもあると思う。袋町小学校については、残すことについて大きな議論があった。教育委員会としては、残してほしくないというのが本音だったと思う。資料館本館がクローズする段階で、袋町小学校も、旧日本銀行広島支店、本川小学校も一体的に運営するべきであった。今、津村委員はその努力をしていただいているようであるので、期待していけばよいのではと思う。

(渡部委員) おそらく、これは市長に報告することになるので、その時に横串の強化についてお願いし、この懇談会の議論ではないかもしれないが、必要なことなので、市長ほか皆さんに考えていただきたいという話ができればうれしい。